



「詰まるところ、人だな」。

本書を読み終えた私は、一人ごちた。

期待を裏切らない本とは、まさにこの本のこと。本書は、私にとっても「ジオパークマネジメント」の入門書となっただけでなく、「地域経営マネジメント」の入門書ともいえる一冊になった。決して「ジオパーク」ありきなのではない。本書が終始一貫して示唆しているもの、それは、地域固有の経営資源と多様な人材を利活用して「新しい価値」を創造する、システムづくりの必要性に他ならない。言い換えれば、多様な人材の力を借りて地質遺産という原石を磨き、ジオパークという宝石に仕立てていきましょう、ジオパークを地域固有の経営資源として活用し、「そこにしかない、オリジナルの、新しい地域の魅力を生み出しましょう」という、新しいビジネスモデル創出の提案でもある。

著者は全編を通じて、努めて冷静、客観的にジオパークとは「何か」を解説している。活字を追っているだけでは、像を描き切れない「ジオパーク」なるモノを、読み手の頭の中に、しっかり描き出してみせてくれる。「ジオパークはプランナーであれ、プレーヤーであれ、担い手となる『人』しだいで成否が決する」という著者のゆるぎない思いがあるからこそ、おぼろげだった、読み手のジオパーク像がだんだん明確になっていくのであろう。

では、ジオパークマネジメントの担い手となるべき「人」とはどのような人なのか。担い手となるべき「人」が、アウトプットすべきマネジメントとはどのようなものなのか。

著者の答えは実に明快だ。求めるべき「人」は「創造力のある人」だと喝破。「創造力」とは、情報力・企画力・人間力・商品力・経済力—の五つの能力をフル活用した能力であると指摘、強調する。

その上で、著者はいう。「世界的に貴重な地質遺産であっても、学術的価値があるサイトであっても（略）地域の持続的発展に寄与する資産や資源の一部であるとの位置付けが必要で、その活かし方や運用を具体化する術が大切である」と。

であるならば、「創造力のある人」に期待するマネジメントとは、「地域の持続的発展に寄与する」という思いを持って、地域固有の地質遺産を活かすための方策を具体化すること、ということになる。

これを料理に例えるなら、地域固有の食材の良さを引き立たせる、他の食材や調味料・香辛料を探してこれに加え、押しも押されもしない「郷土料理を創作すること」ということになろうか。

ジオパークがこの日本の地に定着し、「新しい価値」を創造するには、これまで以上に創造力のある、多様な人材の結集が欠かせない。創造力と多様性が大きな推進力となって、いままで想像もしなかったようなジオパークの魅力を、心から愛でられる日が遠からず訪れることだろう。

この本は、そうした「思い」と「目標」を共有するための架け橋に、きつとなる。